ようこそ朝霧海斗のいる教室へ

お豆腐

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

憐桜学園での事件から禁止区域へと戻った海斗。

もしも麗華が探しに来る前に坂柳理事長に会っていたらというｉｆストーリーです。

暁の護衛をプレイしていない人だとわからないネタなどがあります。よう実は好きだけど暁の護衛はプレイしていない、という方は面白くないかもしれません。

少しだけあとがきで本作の主人公である朝霧海斗については補足します。

ご都合主義万歳のお話ですので気に入らなかったらブラウザバック推奨です。

目次

第1話　ここから始まる『非日常』 ―― 1
第2話　杖の少女との邂逅 ―― 6
第3話　『育成方針殺人事件』 ―― 15
第3・5話　坂柳有栖の独白 ―― 20
第4話　『日常』の終わり ―― 24
第5話　雲外蒼天 ―― 37
第6話　いざ、実力至上主義の教室へ ―― 46

第1話　ここから始まる『非日常』

あちらの世界とは隔離された世界。
力が全て、他人は生きる糧でしかない。
あちらの世界では不自由は無かった。一番嫌いな『退屈』から抜け出せた。
けど結局俺の存在はあちらの世界では迷惑でしかない。
家族を持たず、戸籍を持たず、友人も持たない。そう、俺は持たざるもの。ただの死人だ。
学園での事件の後、俺は二階堂邸を飛び出した。これ以上あの屋敷にいることは麗華の迷惑だと解ったから。いや最初から解っていたんだろう。それでも居心地がよかったからあそこに居続けた。だが俺は結局ここに戻ってきたんだ。
『禁止区域』に――

人は平等であるか？という問いに過去の偉人の一人はこう説いたそうだ。
『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』
俺はこの一説をまったく肯定することができない。

人は生まれながらにして不平等だ。生まれた環境も違えば生まれ持った才能も違う。金持ちの家に生まれれば食うものも困らず、よっぽどのことでもなければ生きていくのに苦労もしないだろう。

顔が整っていればそれだけで不細工よりも他者を魅了できるだろうし、勉学も肉体も生まれた時点である程度のことが決まると思う。

故に人は平等ではない。

それが俺の答えだ。

そんなことを考えながら今日も一日が過ぎていく。なんの目的も無く、なんの意味も為さず、惰性で生きるために生きていく。

禁止区域に戻って二日目。部屋で寝ていたところに気配を感じた。

俺の家に来るということは昔から禁止区域に住んでいる人間ではないだろう。

ここの人間で俺の家に近づく奴は誰一人としていない。

気配は三つ。どれも禁止区域の人間の気配ではない。だがその足取りに迷いはなく一直線にこちらに近づいてくる。

（１０、９、８……二手に分かれたか）

二人と一人に分かれれば狙うは一人の方だ。人質に取ることもできれば簡単に殺す

こともできる。

（2、1……）

俺はドアを開けるとそこにいた男の首に手を伸ばし力を込めて地面にたたき伏せた。それは意識を刈り取るには十分な一撃だ。俺のもくろみ通り男は白目を向いていた。

「禁止区域の人間じゃないな？俺に何の用だ？それともこんなところで人違いか？」

俺は薄い笑みを浮かべ残りの二人に殺気を飛ばす。おそらく大柄な方はボディーガードだろう。

「……朝霧、海斗君だね？」

少しの沈黙の後に口を開いたのは４０歳そこそこの男だった。

「なんで俺を知っている？」

「似ているからだよ」

「似ている？誰にだ？残念だが俺は自分と同等レベルのイケメンにはあったことが無いんだがな」

「君のお父さんに」

「!?……どうして親父を知っている？」

「……」

男はじっと俺を見据えてくる。それは好奇心と、どこか期待を込めたような視線だっ

た。
「君はここで生活していて満足かい？」
「なに？」
「君のことを調べさせてもらった。憐桜学園をやめたようだね」
「質問を質問で返されるのは好きじゃないな」
「君のお父さんのことはとりあえずおいておこう。君はここでの生活に満足していないはずだ」
「どうしてそう言える？住めば都っていうだろう？俺は特に不自由はしていない」
「不自由はしていないだろうね。だが満足はしていない」
「……何が言いたい？」
「私の運営する学校に来ないか？」
「……あんた正気か？さすがにその年で認知症でも患っているなら笑えないな」
「貴様！」
　ここにきて男の傍らにいたボディーガードが声をあげ、こちらに殺気を飛ばしてくる。だがそれを男は手で遮った。
「ここに来るのは正直これが最初で最後だと思っている。いくら優秀なボディーガードを雇ってもここにきてはただの雑兵だ。次に来た時に命の保障は無い」

「なんで今日は安全に帰れると思ってんだ?」
禁止区域ではこいつらが着ている服でさえも略奪の対象だ。いや、命さえも。
「君は私と一緒に来ると確信しているからだよ」
「なんでそう言い切れるんだ?」
「殺されるからだよ」
この男は今何と言った?殺される?ありえない。これは慢心でも無く妄言でも無い。たとえ銃を持った相手でも俺は死なない自信がある。唯一死の恐怖を感じた親父はもうこの世にはいない。一体俺を誰が殺せるだろうか。
「面白いな。一体俺が誰に殺されるんだ?」
「『退屈』に、だよ」
憐桜学園をやめてここに来ても俺はやっぱり『退屈』が嫌いだ。いつだって求めてしまうんだ。今とは違う『非日常』というものを。
「……く、くく。あんたやっぱりどうかしてるぜ?そう言えば名前も聞いてない」
「私は坂柳という。では行こうか、朝霧海斗くん。高度育成高等学校へ」
「ああ」
そして俺は一歩を踏み出した。たかが一歩が俺の日常を非日常へと変える。そんな予感がした。

第２話　杖の少女との邂逅

禁止区域を出るといかにも金持ちが乗っていそうな黒光りの車があり、坂柳のおっさんに促され俺は車に乗り込んだ。

「で、あんたの経営する学校とやらに向かうんだろう？まだ詳しい話は聞いていないが」

俺の問いかけに対し坂柳のおっさんは愉快そうに笑った。

「いや、向かっているのは私の家だよ。今は春休みだからね。君には入学式までの間、私の家で暮らしてもらうよ」

「……待て、入学式だと？」

「そうだよ」

とんでもないことをあっけらかんと言うおっさんだ。

「俺は来年度から憐桜学園でも３年だぞ。いくらなんでも」

「大丈夫だよ。君は若々しい」

「まあ、確かに俺はイケメンだが」

「いや、そんなことは言ってないんだけど……。それに君は自分の正確な年齢がわかるかい？」

「……」

確かに俺は自分の年齢も誕生日も知らない。物心ついた頃にはあの禁止区域で、あの親父に育てられていた。いや教育か。

「それから私の運営する学校のことだったね。公平を期すためにも詳しいことは言えないよ。ただ一言で言うなら生徒を実力で図る学校だ」

「実力で図る、か」

「退屈しないのは保証するよ。その中で本気を出すのも、実力を隠すのも君次第だ。それから君の個人情報のことだが」

そう言い坂柳のおっさんは俺にクリアファイルをさしだしてきた。

そこには俺の名前で全く身に覚えのない経歴が綴られている。

「安心したまえ。うちの学校には君が今まで見てきたような資産家の跡取りが居るわけではない。情報量も限られている。君の経歴が怪しまれることはないよ」

「そうか、最後にひとつだけ聞きたい」

「家につくまでの間だけだよ?」

禁止区域を出て車に乗ってからすでに二時間が過ぎようとしていた。

「あんたの目的はなんだ?」

「ん?」

「まさかとは思うが慈善事業でこんなことをしてる訳じゃないんだろう？親父がらみか？」
「……どうやら時間切れのようだね」
「なに？」
「ようこそ我が家へ」
　俺は車窓から外を眺めた。二階堂ほどではない。だが間違いなく資産家の家だ。そう思えるほどに立派な屋敷がそこにはあった。
「まあいい。『退屈』から抜け出せるなら理由はかまわない」
「……そうか。それでは行こうか。有栖に声をかけてくれ」
　おっさんは使用人に声をかけると歩を進めた。俺もそれについていく。屋敷にはいるとおっさんの書斎らしき部屋に連れていかれた。
「もう少しで来ると思うから君も座って待ってるといい。」
　おっさんに促されるまま俺は高そうな椅子に腰を掛けた。話の流れから察するに誰かがここに来るようだ。その時扉をノックする音がした。
『お父様、有栖です』
「入りなさい」
　扉が開くと杖をついた少女が入ってきた。少女はその視線をほんの少し俺に向ける

とおっさんの方に歩いて行った。しかし金持ちというのは必ず顔が整って生まれるのか。いやその仮説が正しければ俺は間違いなく超絶金持ちの家に生まれているはずか。
「朝霧君、娘の有栖だ。有栖、しばらく家で預かることになった朝霧海斗君だ」
おっさんが互いに互いを紹介した。すると先ほど一瞬だけこちらに向けた視線を今度は正面から向けて少女は頭を下げた。
「坂柳有栖と申します。よろしくお願いしますね、朝霧君」
「ああ」
「有栖は来月から君と同じ一年生だよ」
まじか、どう考えてもこいつと同じ学年なんて無理だろう。いやこいつの見た目が幼すぎるだけか。
「有栖、朝霧君を空いている客室に案内してあげなさい」
「はい。お父様。朝霧君、こちらへ」
そういい少女は杖を使いながら歩き始めたので俺も後をついていった。

長い廊下を歩いていると少女は足を止めてこちらに体を向けた。その視線は俺の瞳をとらえていた。
「朝霧君は優しいんですね」

「俺は地元じゃ優しくないことで有名だ。幼稚園の時からあだ名はジ〇イアンだ」
　そういうと少女は杖を持っていないほうの手を口に当てて、クスクスと笑い出した。
「私の歩幅に合わせてくれているのでしょう？」
「とんだ勘違いだな。目的の部屋を知っていれば俺はお前を置いてマッパで部屋に向かっているところだ」
「どうして裸なのですか？」
「いや、特に意味はないが」
「それに同情しないのですね、私を見て」
「同情することなんてないだろ。先天的か後天的か知らんが、お前は体に不自由を抱えている。俺は健康体でいる。それだけだ」
「……そのように言われたのは初めてです。ここが朝霧君のお部屋です」
　案内された部屋にはベッドなどが置かれていた。確かに客人が一日を過ごすのには不自由はなさそうだが、約一月もいるとなると手持ち無沙汰になるのは目に見えている。
「おい有栖」
「おや、いきなり名前で呼ぶのですか？」
「この家にはお前以外にも『坂柳』がいるんだろう？嫌なら別の呼び方にするが」

「いえ、有栖でかまいません。では私も海斗君と。それでどうしましたか？」
「さすがにこの部屋に何日もいたら暇だ。思いつく暇つぶしとしたら奇声を上げるか金縛りごっこをするかぐらいしかない」
「とても気になる暇つぶしですね。何かほしいものがありますか？」
「本とかあれば嬉しいんだが」
「本ですか。私の部屋にあるものでしたらお貸ししましょうか？」
「頼む」
「ではこちらです」

「どうぞ入ってください」
　有栖に促され俺は部屋へと足を踏み入れた。最大限の注意を払って周囲を警戒する。しかし部屋の中には予想していたものはいなかった。どうやら金持ちは皆が皆チーターを飼っているわけではないらしい。
「好きなものを持って行ってください」
　有栖の部屋の本棚には結構な数の小説があった。本が好きとはいえ世の中にはまだ読んだことのない本が五万とある。そう思うだけで俺の好奇心と読書欲、知識欲は駆り立てられる。

「本がお好きなんですか？」
「意外か？」
「そうですね。まだ半信半疑です」
「俺は三度の飯より本が好きだ。これとこれとこれと……あとこれを借りていってもいいか？」
「ええ、どうぞ」
　俺は有栖の部屋を後にすると、自室に戻って時間も忘れて本にのめりこんだ。まあ俺の部屋ではないんだが。

　次の日、俺は昨日読んだ本を返すため有栖の部屋を訪れた。
「海斗君？どうしましたか？」
「昨日借りた本を返しに来たんだが」
「もう読んだんですか？」
　有栖は驚いた表情をして俺を見てきた。あまり驚いたりはしないタイプだと思っていたんだがな。
「本当に信じていなかったのか？」
「え、ええ」

「今日も借りていっていいか？」
「どうぞ」
俺は有栖の本棚から物色を始めた。有栖はどうやらミステリーが好きらしい。
「ん？」
その中で俺は一冊の本を見つけた。俺はまさに雷に打たれたような衝撃を受ける。
「こ、これはなんだ!?」
「あ、それはミステリーの巨匠大久保ブーデの未発表作『育成方針殺人事件』ですよ」
ちょ、超読みてぇーーーーーーーーーーーー！あの大久保ブーデに未発表作なんてあったのかよ!?
「借りてもいいか!?」
俺はすごい剣幕で有栖に尋ねたが、どうやら若干引いてるようだった。
「ほ、本当に本がお好きなんですね。ですがそれは借り物ですので……」
くそっ！いやここで引いてなるものか！あの大久保ブーデの未発表作だぞ!?こんな機会二度とないはずだ！
「では海斗君、これで勝負しませんか？」
そういう有栖の手にはチェスのキングの駒が握られていた。その口元には不敵な笑みが浮かんでいる。

「チェスか？」
「そうです、ルールはご存知ですか？」
「当たり前だ。王の命令は絶対に聞かなければいけないやつだろ？」
「……それは王様ゲームです」
「ちょっとしたミステイクだったか。あれだろ？馬鹿には見えないやつだろ？」
「……それは『裸の王様』のことでしょうか？……知らないんですね？」
「ああ」
「ではルールブックをお渡しします。明日勝負しましょう。もしも勝つか、いい勝負ができたらその本をお貸しします」
「いい勝負か、また曖昧な条件だな」
「楽しみにしていますよ、海斗君」
　ここに死んでも負けられない勝負がある。

第3話　『育成方針殺人事件』

部屋に戻った俺は早速、有栖から渡されたルールブックに目を通した。チェスのルールは知らんがその特徴は小説によく出てくるので知っている。

――チェスとは思考的スポーツである。

いわゆるマインドスポーツだ。対戦相手の思考が見えやすいものだが、いかにも有栖が好きそうだ。1日で有栖の実力を上回ることは難しいだろう。ならば俺がやるべきことは駒の動きと役割を覚えるだけだ。後はその時の状況に臨機応変に対応するだけだな。

次の日、有栖の部屋に行くとすでにチェスボードに駒が並んでいた。そしてまるで見せつけるように『育成方針殺人事件』が置かれている。つうか別に借り物でも貸してくれるくらいいいだろう。こいつの性格の悪さが如実に出てやがるな。

「待っていましたよ、海斗くん。ルールは覚えてきましたか？」

「ああ」

俺は有栖と向かい合う形で座る。

「その前に確認しておきたいことがあるんだが」
「なんでしょうか？」
「有栖はチェス得意なんだよな？」
「そうですね。小さい頃からやっていますが滅多には負けません」
そう言う有栖の口許には笑みが浮かび、顔には自信が満ちている。
「そうか。それが確認できればいい」
「？」
この勝負の勝利条件は公平なように見えて公平ではない。チェスの決着には投了、チェックメイト、そしてステイルメイトがある。まあこんな流暢に語ってるように見えて昨日はじめて知ったんだがな。
俺がチェス童貞なのに対して、有栖は経験豊富だ。つまり有栖にとっての勝利条件はチェックメイトのみだが、俺にとってはステイルメイトもまた勝利条件のひとつなのである。
あれだけどや顔で語っておいて『ステイルメイトでは勝ちとは認められません。』なんて言われたら俺は間違いなくこいつを犯すぞ。
「では始めましょうか。先手は海斗君にお譲りします」

チェスには先攻絶対有利理論というものが証明されている。だから後手は引き分けを狙うらしいが有栖は間違いなくチェックメイトを狙ってくるだろう。まあこんな流暢に語ってるように見えて昨日はじめて知ったんだがな。

俺は捨て駒のポーンを動かした。よし、この名誉兵士には『尊』という名前を授けてやろう。俺の勝利のために無様にやられて来い。

開始一分で真っ先に退場させられたのが『尊』だったのは言うまでもないな。

「しかし、チェスが思考的スポーツとはよく言ったもんだな。お前の性格の悪さがはっきりと見えるぞ」

「ふふふ、なんのことでしょうか?」

有栖は俺が下手に駒を動かすと、ポーン以外の駒が取れるような位置をキープしている。

だが『育成方針殺人事件』がかかっている以上負けは許されない。つまるところチェスとは戦争の縮図だ。より戦場を広い視野で見れるものが勝つというわけだ。まあこんな流暢に語ってるように見えて昨日はじめて知ったんだがな。

チェスでの経験が豊富な有栖だが、禁止区域での生活で磨かれた俺の戦況把握能力には勝てるはずもない。

二十分が過ぎようとしたころには有栖の表情からは余裕が消えていた。

「ほれ、チェックメイトだ」

「……」

勝利の宣告をすると有栖は固まったように盤を見ていた。

「海斗君、一つだけお聞きしてもよろしいですか？」

「なんだ？」

「チェスは本当にこれが初めてですか？」

「昨日も言ったはずだが俺はチェス童貞だ」

「そう、ですか」

「本、借りてくぞ？」

「ええ、どうぞ」

そう言い有栖は本を手渡してきたので俺は急いで自室に戻っていった。

「やはり大久保ブーデの作品は素晴らしいな」
部屋に戻った俺は時間も忘れて『育成方針殺人事件』を読みふけった。
「これが読めただけでも禁止区域から出た意味はあったな」
時計を見るとその短針はすでに二時を指していた。俺は明かりをつけたまま布団に入り寝りにつこうとした。
この屋敷に来て三日が経ったわけだが思いのほか居心地がいい。つい先日までいた禁止区域がまるで嘘のように落ち着いている。そして心のどこかで有栖といる生活にも充実感を得ている自分に気づいた。
「まあ、退屈はしなさそうだな」
あと三週間ほどで始まる学園生活もなかなか期待できそうだ。
俺は自分の中に芽生えていた感情をよそに、意識を手放した。

第３．５話　坂柳有栖の独白

私は『育成方針殺人事件』を片手に、豪快に鼻をほじりながらスキップして部屋を出て行く海斗君の背中をただただ黙って見つめることしかできませんでした。

海斗君は私に嘘をついていた？

いえ、それはおそらく無いでしょう。まだ数日ですが彼がいかに本が好きかはわかります。そんな彼が『育成方針殺人事件』を前にして、チェスをやったことが無いという嘘を吐き、わざわざ次の日まで待つとは考えられません。

つまり初心者の海斗君に私はチェスで負けた。

私には海斗君に勝つ自信がありました。小さいころから大人相手にも負けたことがありません。でも私は海斗君相手に完膚なきまでに負けました。

でも悔しいという気持ち以上に、私は新しいおもちゃを見つけたような気持ちになりました。

とは言いましても、海斗君に対して違和感を覚えたのは実は彼が私の屋敷に来た当日でした。

お父様に言われ海斗君を部屋に案内しているときです。私は先天性疾患のため杖を使っての生活を強いられています。そんな私に対してほとんどの方が同情的な感情を抱きますが彼は違いました。彼は私に対し一切の同情も興味も抱いていませんでした。

そんな彼に私は探りを入れてみました。

私には多少のコールド・リーディングの覚えがあります。

相手との会話や仕草の中で相手の思考を読み取る、マジシャンなどがよく使っているあれです。

ですがやはり私には海斗君の思考を読み取ることができませんでした。

私は居ても立ってもいられなくなりお父様の書斎に向かいました。

「お父様、お父様と海斗君はどのような関係なのでしょうか?」

「……まあ、いきなり一緒に住むようになったんだから気になるのは当然か」

そういいお父様は鍵のかかっている引き出しから一枚の写真を取り出し、遠い目をして語りだしました。

「私は海斗君と会ったのは先日が初めてなんだ」

「え?」

「私は彼のお父さんと知り合いだったんだ」

「海斗君のお父さん、ですか？」
「うん。すごい人だった。勉学も体術も完璧でみんなから尊敬と信頼を得ていた。本当に、すごい人だったよ」
「では、お父様が海斗君を連れてきたのはなぜですか？」
「……それはきっと、せめてもの罪滅ぼしだよ」
「どういうことでしょうか？」
「……いや、この話は終わりだ。そして今後もこの話題はよそう」
お父様はきっと二度とこの話には答えてくれないでしょう。そういう方です。
「わかりました」
私はそのまま書斎を出て行く。しかし扉を閉めようとしたときお父様から声がかかった。
「有栖。海斗君も素晴らしい人間だ。きっと学園生活を、いや有栖の人生を面白くしてくれるよ」
「ええ、私もそのような気がしています」
廊下を歩く私の顔にはきっと笑みが浮かんでいることでしょう。
彼の過去について興味がないといえば嘘になりますが、そんなことよりも彼のことをもっと知りたい。頭の良さ、思考回路、身体能力。お父様の話を聞いて私の予感と期待

はだんだんと大きくなっていく。

高度育成高等学校、楽しみなのは綾小路君だけだと思っていましたが……

実力が未知数というのも面白いですね。

窓の外には桜の木があった。

私が窓を開けるとまるで待っていたかのように一枚の桜の花が降ってきた。

春は出会いの季節と言いますが、少し暖かくなってきた春の風が私に海斗君との出会いを運んできてくれた。私はそんな気がしました。

第４話　『日常』の終わり

「ふう」

有栖に本を返しに行こうとしたがまた読みたくなってしまい、結局俺は５回も読み直してしまった。そのおかげで内容はおろかセリフの一つ一つも覚えてしまっていた。

「さすがに返しに行くか」

しかし楽しみにしていた本なだけあって読み終わってしまうと何とも言えない感情だ。

あと一週間近くあるここでの生活も退屈にならなければいいが・・・

『海斗君、有栖です』

用事があるのか有栖が俺の部屋に来たようだ。

ちょうどいい、あれをやるか。

『海斗君？』

「……」

『寝ているのですか？』

「た、助けてくれ有栖……」

『？』
「いいから早くっ！」
『入りますよ？』
扉が開くと有栖が入ってきた。
俺はここぞとばかりに演技をすることにした。
「く、お……お……！」
ベッドで横になった俺は突如金縛りに襲われた。
両手足に神経を集中しようとするが動かない。
「……」
有栖からものすっごい冷めた視線を感じる。もちろん自分が痛いことはすでに分かっていたが、中途半端にやめることは許されない。
「あ……う……く！」
「……もしかして以前言っていた金縛りごっこでしょうか？」
迫真の演技が通じた瞬間だった。
「……なるほど」
有栖は俺が金縛りにあっているのをいいことにゆっくりと近づいてきた。
「……顔にテレビを落としたら衝撃で金縛りも解けるでしょうか？」

「たぶん体の活動も終わりを迎えるから止めてくれ」
　俺はベッドから起き上がり、借りていた『育成方針殺人事件』を有栖へと返した。
「面白かったですか？」
「５回も読んじまった」
「それはよかったです」
「で、なんか用だったか？」
「そうでした。お父様が書斎に来てほしいと」
「わかった」

　書斎に行くと坂柳のおっさんがすでに待っていた。
「おはよう海斗君。もうここでの生活には慣れたかな？」
「まあ、ぼちぼちだな」
「それはよかった。さて、いよいよ来週から高度育成高等学校に入学するわけだけど。君は私服持ってないよね？」
「ああ」
　まあ憐桜学園では制服だったし、二階堂の屋敷にいた時はスーツだったからな。私服

なんて着る機会なかったし。
「だから今日は私服を買っておいで。有栖も今日買い物に行くって言ってたからカードは有栖に持たせてある」
「いや、別に制服だけあればいいんだが」
「休日まで制服で出歩くわけにはいかないでしょ？それにずっと屋敷にいるのも暇だろうし、気分転換もかねてさ」
「まあ、そういうことなら」
　と言うわけで有栖との買い物が決まったわけだが。これが坂柳邸に来て一番の『非日常』になるとは思ってもみなかった。

「お待たせしました、海斗くん」
　玄関で待っていた俺のもとへ有栖がやって来た。
「遅かったな。無い胸を寄せに寄せて谷間でも作ってたのか？」
「……見ていたのですか？」

「いや、適当に言っただけなんだが」
まさかこいつがそんな涙ぐましいことをしていたとは、今度から優しく接してやろう。
「海斗くん」
何を思ったのか有栖は怖いくらいの笑みを浮かべている。
「次にでる『なにわ探偵シリーズ』の犯人は山田さんなんですよ」
「……」
時が止まった。有栖の口がさらに横にのびた。どうやら俺の思考が止まっていただけらしい。俺は男に尻を掘られようがナイフで脅されようが恐怖しない。だが目の前の少女は俺が唯一恐れる手段を持っていた。もうこいつの身体的特徴をからかうの止めよう。
「さ、行きますよ海斗くん」
「……ああ」
俺と有栖は玄関先に止められていた車に乗り、目的のショッピングモールへと向かった。

「それにしても、お嬢様ってのはこういうショッピングモールとはあまり縁が無さそうなんだがな」
「私の家は別にお金持ちではありませんよ？一般的な家庭に比べると多少裕福なだけです」
「はぁん」
こいつの家が一般家庭より多少の金持ちならあちこちに屋敷が乱立するだろうな。
「ここが私の行き付けのお店です。」
そこにはショッピングモール内の他の店より明らかに高級そうな佇まいの店があった。
「どれどれ、子供用の服は売ってるのか？」
「海斗くん、また本のネタバレをして差し上げましょうか？」
「すまん、忘れてくれ」
これから先もこんな脅しがくるなら対策を考えないとな。
有栖は慣れた足取りで店内を歩き始めた。
「海斗くん、これなんていかがですか？」

そう言い有栖は置かれてあった服を自分の前に持ってきた。
「いいんじゃねーのか？馬子にも衣装って感じで」
「……まさか一行の会話文で誉めて馬鹿にされるとは思いませんでしたよ」
「俺にそういうセンスはないから聞かれてもわかんねーよ」
「では海斗くんの服は私が選びましょう。今日付き合っていただくお礼もかねて」
「悪いな」
有栖は自分の分の服を決めると男物のコーナーへと足を運んだ。
「これなんて海斗くんにとてもお似合いだと思いますよ」
そういう有栖の手には白のタンクトップが広げられていた。しかも真ん中にハートマークがプリントされている。つかなんでこんな店にこんな趣味の悪いもんが置いてあるんだ。
「お前はセンスが無さすぎるな」
「それ、海斗くんには言われたくないですね」
「はあん。さては俺の服のセンスを知らないな？」
「昨日履いていた靴下破けていましたよね？センスのある方はあんなもの履かないと思いますが？」
「あれはダメージソックスっていうんだ。そんなことも知らないのか？」

「そうですか。爪先だけ破れていた気がしますが？」
「お洒落だろ？わざわざ破いたんだ」
「……はぁ。どうやら真剣に選ぶ気は無いようですね。わかりました。私の方で適当に一週間分位買っておきますね」
「頼む」
「では」
　有栖は財布を取り出すと俺に一万円札を渡してきた。
「なんだ？これで抱いてくれってか？」
「足りませんか？」
「そうだな。お前みたいな不細工を抱くとなるとこの１０倍は貰わないと勃ちもしねーよ」
「では返していただきます」
　俺は一万円札へと伸びた有栖の手を阻止した。
「まあ待て。なんなんだこの一万円は？」
「私が買い物している間暇でしょうから本屋でもと思いまして」
「あれ？お前よく見たらめちゃくちゃ可愛くないか？」
「……３０分以内には戻ってきてくださいね」

「ふぅ買った買った。まさか『湯煙りショットガン』が買えるとはな」
麗華が持ってたのに頑なに貸してくれなかったから気になってたんだよな。
俺は二十冊ほどの本が入った袋を片手に有栖の待つ服屋へと足を進めた。
ーバンッ
その時ショッピングモールでは聞くはずの無い音が聞こえた。間違いない、銃声だ。
俺が向かっている服屋の方角から大人数が走ってくる。それが普通だ。巻き込まれそうになったら逃げる。それが危ないものであればあるほど全力で逃げる。それが当たり前で、とるべき行動だ。
俺は音のした方向へと駆け出していた。
なぜと聞かれればこう答える。
真逆だから、普通の行為とは真逆だから。それが『非日常』だから。

音の発信源は先ほどまで有栖といた服屋だった。その中に見慣れた顔を見つけた。
「てめら一歩も動くんじゃねーぞ！一歩でも動いたらこいつの頭をぶち抜くからな!!」

有栖は犯人らしき男に銃を突きつけられていた。遠くから見てもわかるように震えている。それは当然だ。あいつは好戦的な性格だが、それはあくまで日常生活のなかでの話。ルールが決められているもののなかでの話だ。

さすがにあいつを置いて帰るわけにもいかないし、憐桜学園の時のような縛りはない。ならば少しくらい実力を見せてもいいだろう。

俺は目を閉じて神経を集中させる。犯人の気配は一人、そのほかは一般人か。

俺は有栖のもとへと歩いていく。

「て、てめえ！動くなって言ってんのが聞こえねえのか!?」

男は銃を俺に向けてくる。どうやらこいつはそんなもので俺を殺せると思っているらしい。

「あんた、これが初犯だろ？」

「なんだと？」

「人質にするにはいくつかの条件がある。その中で絶対なのが満足に動けることだ。なぜなら逃走の時にろくに走ることができなければそいつは人質としての機能は果たせず、ただの足手まといになるからだ。そんなもの常識だろ？」

「……っく！」

男は思うところがあったのか顔をゆがめる。

「そいつを見てみろ。杖を使って歩いてるぐらいだ。逃走の時にそいつも一緒に走れるわけがないだろ?」
「な、ならお前を人質にしてやる!」
　男は有栖の背中を押すとその後ろから銃を構えた。
「手を挙げてこっちに来い!」
　有栖がこちらに歩いてくる。俺も両手を挙げて近づいていく。そしてすれ違う時有栖の口が動いた。
「か、海斗君……わたし……」
　その声は震えていた。
「大丈夫だ。俺が死ぬわけないだろ。だが、それは油断じゃない。絶対に死ぬわけがないんだよ」
　俺はそのまま歩き、犯人のもとへとたどり着いた。
　そのとき不意に音がした。おそらく誰かのスマホの着信音だろう。
　犯人の意識が一瞬それた。それを俺が見逃すはずがない。俺は水月にこぶしを叩きこんだ。
「!?」
　思いきり急所を叩いたのだ。声にならない声を出し、犯人は地面に倒れこむ。

しかしこのような犯行に及ぶくらいだ。よほど切羽詰まっているのだろう。犯人は銃を構えなおし俺に向けてきた。

「殺してやる!」

かなり頭に血が上っているようだ。俺はさらに犯人に近づいた。

「どうした?.銃口が震えてるぞ?」

「う、うるせぇ!」

そういう犯人の手の中の拳銃はカタカタと音を立てている。

「人を撃ったことが無いのか?.そんなもんじゃビビってもくれないやつがいるってことを覚えておいたほうがいい」

「こ、この野郎!」

「おせぇよ!!」

俺は犯人の顔面を蹴り上げた。再び地面に転がった犯人は意識を失っているようだ。

わずかな沈黙の後、その場にいた人たちは様々な様相を呈した。涙を浮かべるもの、安堵するもの、笑みを浮かべるもの。

そんな中俺は腰が抜けているのかその場に座り込んでいる有栖を抱え、車が止められている場所まで駆けていった。車に乗り込みすぐに坂柳邸に向かうよう運転手に言い、

車は帰路を辿った。その道中有栖に何か言われるかと思ったが、有栖は心ここにあらず
といった様子で車内は坂柳邸につくまで静寂に包まれていた。

第5話　雲外蒼天

「有栖！」
「お……父様？……お父様!!」
有栖は坂柳のおっさんに抱き着くとわんわんと泣き始めた。
身近な人間が来たことで緊張が解けたんだろう。
俺は坂柳邸に来て初めてあいつの年相応な姿を見たと思う。

車を降りてから有栖を連れてまっすぐにおっさんの書斎に来たが、おっさんの反応を見るに事前に知っていたようだ。
有栖は使用人にどこかに連れていかれた。
「海斗君、娘を・・・・有栖を助けてくれてありがとう!!」
おっさんは目の端に涙を浮かべながら頭を下げてきた。
「やめてくれ。別にあいつを助けたわけじゃない。たまたまだ」
「たとえそうでもお礼を言わせてくれ。本当にありがとう！」

親と言うのは子どものことになるとこうなるものなのだろうか。もしも有栖が俺で、おっさんがオヤジだったら俺は確実に殺されてただろうな。
「しかし海斗君。なぜすぐに屋敷に戻ってきたんだい？」
おっさんは目の端の涙を手で拭うと落ち着きを取り戻したようだ。
「さすがにあの場にいたら事情聴取されるからな。とはいっても監視カメラに映ってる有栖からそのうちここに警察が辿り着くだろうが。俺は戸籍を調べられたらやばいからな」
「なるほど」
「おっさんにとって迷惑なら今日にでも出て行く」
「何をいってるんだ。海斗君、君は恩人だ」
「……そうか。部屋に戻る」
「海斗くん、気が向いたらでいい。有栖に会いに行ってあげてほしい」
「ま、気が向いたらな」

「ふう、面白かったぜ『湯煙りショットガン　』」
部屋に戻った俺は有栖にもらった金で買った小説を読み漁っていた。
有栖と言えばあいつはどうしたんだろうか。
おっさんに有栖に会いに行けと言われたが……
ふと時計を見るとその短針は夜中の９時を指していた。
まあ、あれだけのことがあったんだ。明日行ってやるか。
「よし、風呂に行くか」
俺は読み終えた小説をテーブルに置き、風呂に向かった。

「ん？」
風呂に向かう途中、見慣れた背中を見かけた。
「相変わらず冴えない背中だな、有栖」
「……海斗、君」
「お前も風呂か？」

「……」
「まあいいや、じゃあな」
「あの海斗君、今お時間よろしいですか？」
「ちょっと待て、今予定を確認する」
　俺はポケットからスマホを取り出し、スケジュールアプリを開いた。もちろんこのスマホはおっさんにもらったものだ。
「なにも、書かれていないようですが？」
「お前、ボケる前に突っ込むなよ」
「……」
「わかったよ。で、なんだ？」
「海斗君のお部屋でもいいですか？」
「お前の家なんだからどこでもいいぞ」
　俺は有栖の後に続き歩いた。ふと目に入ったその後ろ姿にはやはり元気がない。
「まあ座れよ」
「はい」
　有栖はベッドに腰を下ろした。

「海斗君。今日はその、情けないところをお見せして申し訳ありません」
「銃なんて突きつけられたら誰だって取り乱す。それが普通だ。むしろ取り乱さないやつなんて異常だ」
「海斗君は取り乱していないようでしたが？」
「……あの銃、おもちゃだと思ってたんだよ。だから取り乱さなかっただけだ」
「……そう、ですか」
「……」
「……」
「それだけなら俺は風呂にいくぞ」
そう言い俺は再び風呂に向かおうとした。
「海斗君！」
「……なんだ？」
「あなたはいったい何者ですか？」
「難しい質問だな」
「私はチェスで負けることなんて滅多にないです。ましてや昨日今日ルールを覚えた人に負けるなんてことは……それに今日のことだって海斗君はあれが本物の銃だとわかっていたはずです。海斗君、あなたは……」

有栖から向けられた視線には疑念、興味、恐怖、いろんな感情が入り乱れていてた。
「悪いが俺は読書だけしか趣味が無いようなどこにでもいる人間だ」
「…しかし」
「話がそれだけなら俺は風呂に行くぞ」
俺は今度こそ風呂に向かうため部屋を出ようとした。しかしドアに手をかけた時再び有栖の声が響いた。
「海斗君！」
「なんだ、まだなんかようか？」
「せめて一つだけ、教えていただけませんか？」
「俺に答えられることならな」
「どうすれば海斗君みたいに強くなれますか？」
「……」
「……」
「絶望、挫折、屈辱」
「……え？」
「自分をどん底に突き落とすくらいの絶望、挫折、屈辱を味わい尽くすことだ」
「……味わい、尽くす？」

「生まれてから死ぬまで常に勝ち続ける奴なんていない。いつか必ず負けるはずだ。そのときに味わったものは二度と味わいたくないと思うだろう。それが成長する糧になるはずだ。じゃあ俺は今度こそ風呂に行くぞ」
「……はい。海斗君、ありがとうございます」
部屋を出るときに見えた有栖の顔には少しだけ元気が戻っているような気がした。

「で、なんでこいつは俺のベッドで寝てるんだ?」
風呂から戻ると俺のベッドで有栖が寝息を立てていた。
「……さてどうしたもんか」
不幸中の幸いは明かりをつけたまま寝てくれていることか。俺は暗いところでは寝れないから。
「床で寝るか」
俺は自分の背中を床に預け目を閉じた。

「……海斗君？」
「なんだよ起きてたのか？」
「いえ、今起きました」
「なんで俺のベッドで寝てたんだよ」
「申し訳ありません。なんだか海斗君のにおい、すごく安心できて」
「俺昨日そのベッドでオナニーしたんだが？」
「……」
　まただ、また有栖が冷めた視線を向けてきやがる。
「冗談だ」
「海斗君ならありえそうですけどね」
「調子戻ったみたいだな」
「はい。海斗君とお話しして元気が出ました」
「そうか」
「それでは寝ますね」
　そういうと有栖は再び布団をかぶった。
「いや、だからなんで俺のベッドで寝るんだよ」
「これはもともと私の家のベッドですから海斗君のものではありませんよ？」

「お前本当にいい性格してんな」
「ありがとうございます」
「いやほめてねーよ。ったく」
俺は再び目を閉じた。
「……海斗君？」
２０分ほど過ぎたころ有栖がまた話しかけてきた。が、こんなことを続けてたら寝れなくなりそうだからな。ここはあえて無視をしてみよう。
「……海斗君、本当にありがとうございます。海斗君が来てくれて本当に毎日が楽しいです。今日も助けてもらって……どうしてでしょう海斗君と一緒にいるとすごく安心するんです。」
「……」
「なんて聞いてませんよね。おやすみなさい」

さて寝るか。

第６話　いざ、実力至上主義の教室へ

あれから数日が過ぎた。

ここ最近質のいい睡眠がとれていない。原因はひとつ、現在進行形で俺のベッドで寝ているこいつのせいだ。

俺は軽く有栖の頭を叩いた。

「……海斗くん、どうしましたか？」

有栖が頭だけこちらに向けてくる。

「いや、お前がどうしたんだ？明日から学校なんだから今日ぐらいはベッドで寝させろ」

「私はここを退きませんよ？海斗くんもベッドに入ればすべて解決です」

「お前の脳みそは豆腐か何かでできてるんじゃないのか？一度病院で診察してもらった方がいいぞ」

「相変わらず海斗くんは辛辣ですね」

そう言いつつもこいつは退く気が無いらしい。また枕に顔を沈めると静かな寝息をたて始めた。

「もういっそ二度と目が覚めないように沈めてやろうか？」

「……」
「ったく」
俺は仕方なく部屋にあるソファーに横になった。
「海斗くん」
「なんだよ？退く気になったのか？」
「いえ」
「じゃあなんだよ？」
「学校が始まって、もし私と海斗くんが敵対するようなことになっても……こうして構っていただけますか？」
有栖の声が若干震えている。こいつは普段から自分の弱さを見せない。俺が唯一見たのはあのショッピングモールでだけだ。
「……」
「もし、私がピンチになったら……あの時みたいに助けてくれますか？」
「……」
何て答えるのが正解なのか。間違いなく言えること――
それは真っ当に生きてきたこいつが俺なんかに関わるべきじゃないってことだ。
「……だめ、でしょうか？」

「……ま、気が向いたらな」
「……私は、高度育成高等学校で退屈なんてしたくありませんでした。誰でもよかったんです、私を楽しませてくれる人なら……でも」
『有栖う～、有栖たぁ～ん！』って素っ裸で息荒げながら追いかけてくるようなおっさんでも？」
「……すみません、常識的に考えてせめて普通の方にしてくれませんか？」
「俺にはそれが常識なんだ。自分の常識が他者にとっての非常識であることは多々ある。だから、自分の価値観で全てを推し量れると思ったら大間違いだ」
「……はぁ、海斗くんはそうやっていつものらりくらりとやり過ごしますね。でも核心を付いたことも言ってくる。正直卑怯だと思います」
「狙ってやってるからな」
「それで、先ほどのこたえですが」
　これ以上長引くとめんどくせーな。
「……ま、お前には『育成方針殺人事件』を読ませてもらったからな。本当にピンチの時はマッパで駆けつけてやるよ」
「ますます私がピンチになるので服を着てマッハで来てください」
「……」

「……ふふ、ありがとうございます。お休みなさい海斗くん」

有栖は再び寝息をたて始めた。

しかし、まさかまた学校に通うことになるとは思わなかったな。

――高度育成高等学校

実態は知らんが名前と有栖が入学するという時点で普通の学校ではなさそうだ。

身体能力はともかく頭脳に関して言えば有栖はこちらの世界ではかなり上の方だろう。

憐桜学園も退屈はしなかったがこっちも期待できそうだ。

とは言え実力を出して変に注目されるのもめんどくさいな。あくまで平均に位置するくらいがいい……。

憐桜学園時代、俺は学園の汚点だった。佐竹に実力を隠すように言われたがこちらの世界の平均がどのくらいか解らなかった。

身体能力テストの時、俺の前にいたやつより少し下くらいでやったらそいつがかなり下だったらしくそれ以来俺は落ちこぼれを演じてきた。

まあけど上位に行くとそれなりにめんどくさそうだしな。

気楽にやるのが一番か……

気づくと俺の口角はやや吊り上がっていた。自分でもわかる。どうやら思いの外、俺は楽しみにしているみたいだな。

俺は新たな学園生活に期待を膨らませ隣を見た。そこには胸が膨らんでない有栖がいて静かな寝息をたてている。

それにつられるかのように明るい部屋でおれも意識を手放した。

次の日、玄関にはおっさんが見送りに来ていた。

「いよいよ今日から学校だね。有栖、海斗くん、頑張ってきなさい」

「はい、お父様」

「世話になったな」

「とは言っても私も頻繁に学校に行くからね。海斗君の活躍を期待しているよ」

「娘の活躍を期待してやれ」

「それはもちろん、有栖もね。おっともうこんな時間だ」

時計を見ると時刻は７時３０分を過ぎたところだ。車で学校がある敷地の入り口まで行き、そこからはバスで移動する。入学式に間に合うように行くなら時間的にはちょうどいいだろう。

「それじゃあ行ってらっしゃい」
「ああ」
「行ってきます、お父様」
俺はおっさんが用意してくれた車に乗り込んだ。
「有栖！」
有栖が車に乗ろうとした時、おっさんが有栖を呼び止めた。
有栖はおっさんと何か話をしているようだったが内容はわからない。まあ俺には関係のないことか。
話を終えると有栖が笑顔で車に乗り込んできた。有栖がシートベルトを締めると車をゆっくりと動き出した。
「なにかいいことでもあったのか？」
「ええ。教えてほしいですか？」
「いや、まったく」
「……」
「そーいや荷物すくねーけど服とかはどうなったんだ？」
「それは先に寮に送りました」
「そうか」

「学校楽しみですか？」
「まあ、少しはな」
「一緒のクラスになれるといいですね」
「そうだな」
「まったくそうは思っていなさそうですね」
「お前はついに俺の思考を読めるようになったのか」
「なんだかんだ海斗君とは一カ月近く生活してましたからね」
「そうか。一カ月も性活してたのか」
「……それ字が違います」
「着くまで寝るわ」
「眠いんですか？」
「どっかの誰かがベッドを占領してたからあまり寝れなくてね！」
「ひどい人も居るものですね」
「……」
こいつは本当にいい性格してるな。３０分ほどだが寝るか。

「海斗君、起きてください」
有栖の声で目を覚ました。車が動いている感覚はない。どうやら目的の場所についたようだ。
「おはようございます」
「着いたのか？」
「はい、ここからバスに乗ります」
「わかった」
車を降りると門のようなものが見えた。ここから先は車ではいけないようだ。そういえばおっさんが外と連絡が取れないみたいなことを言っていたな。
有栖が先に門をくぐった。俺もそれに続く。
すると不意に有栖が振り返った。
「今日から同じ学校の生徒です。よろしくお願いしますね」
有栖が軽く頭を下げる。初めて会った時のように、でもあの時とは違った表情で。
そんな有栖に俺もつられて笑う。

「……行くぞ」
「はい」
俺たちは歩き出した。

――第一部完――